

研究ノート

宗学について

古河良啓

一、はじめに

日蓮聖人が『立正安国論』に説き示された教えと、その精神を現代社会に伝え、実践していくことが今後の自身の課題である。

そのためにまず考えねばならないことは、時代や社会状況の異なる今日において日蓮聖人の教えをいかに受け止めるか、換言すれば日蓮聖人の教えを学ぶ自身の姿勢はどのようなに在るべきかということである。言うまでもなく、現代の時代状況は十三世紀とはあまりにも異なり、科学技術の進歩や、政治、経済、社会構造、さらにグローバル化や世界の宗教情勢等、その相違は枚挙に暇がない。

そこで、こうした時代状況の中で日蓮聖人の教えを学ぶ自らの姿勢を考えるにあたり、その指針として「宗学」に注目していきたいと思う。

宗学は、一般には「各宗門の教義を極める学問」^一、「自己の所属する宗派の教義の学問」^二を意味し、『日蓮宗事典』の宗学の項では、その冒頭で次のように解説される。

一般に一宗の教義を研究する学問を称して「宗学」とよび、なお教義研究のためには一宗の歴史研究が不可欠であるところから、広くはそれを含めて「宗学」という。日蓮聖人の教えを信奉する日蓮宗では、聖人の教えを宗義として尊重し、宗義の研究を日蓮宗学、日蓮教学と称している。

(一) 宗学という用語はおそらく近代に入って仏教学研究が盛んになったため、それに対応するかたちで出来上ったものであろう。大正末期ないし昭和初期に宗学という用語が頻繁に用いられる以前は「余乗」に対して「宗乗」と称していたもののものである。江戸時代の宗義書などでは、台家(天台家)の義に対置して、当家(日蓮宗)の義、または当家の宗義などと称し、更に遡れば室町時代には日蓮聖人の宗旨ないし聖人遺文を御義といい「宗義に約する」という表現も見られる^三。

すなわち、日蓮宗における宗学とは日蓮聖人の教えを宗義として、その教えを尊重して研究することであり、宗学という用語自体は、大正末期から昭和初期に用いられはじめたもので、それ以前は「宗乗」^四や「当家」、「御義」と呼称されていたことが知られる^五。

ところで、『日蓮宗事典』の宗学の項目は渡辺宝陽氏が執筆されているが、ここでは先に引用した冒頭の一文に続き、優陀那日輝を始めとして浅井要麟氏、望月歆厚氏、室住一妙氏、茂田井教亨氏というように、各諸先師の宗学についての見解が列記されている。このことから、宗学には様々な意義や考え方があり、そこには宗学論と**言うべき多様なアプローチがあることを知る**ことができるのである。

本稿では、今日あらためて宗学とは何かと考えるにあたり、まず諸先師の宗学論を確認し、どのような問題意識や課題のもとに先師は宗学論を展開してきたのか、追体験していくことからはじめたい。

二、諸先師の宗学論

諸先師の宗学論という観点から視野を広げると、日蓮宗現代宗教研究所『所報』第三号に収録される、渡辺宝陽氏の「宗学論―宗学論の回顧と展望―」という論文に注目することができる。同論文では、戦前から戦中、戦後にかけての多くの先師による宗学論が考察されており、それらを通して、宗学の意義やその方法について多様な宗学論が展開されてきた歴史ヒが伺えるのである。

そこで渡辺氏の先行研究に示唆を受け、同論文を手がかりに近代における諸先師の宗学論に関する論文や著述を管見の限り確認してみると、現時点で見出せたものは左記の通りである。

「近代における諸先師の宗学論」

著者	題名	所収	刊行
北尾 日大	宗学及宗門教育の原理	大崎学報六十一号	一九二一年十月
北尾 日大	信仰と研究	大崎学報七十号	一九二六年十二月
宮崎浅次郎	宗教に於ける批判原理―教学者及信仰家の批評立場	大崎学報七十号	一九二六年十二月
浅井 要麟	祖書鑽仰の先決条件(上)―専門宗学者の任務―	法華十八卷十号	一九三一年十月
浅井 要麟	祖書鑽仰の先決条件(下)―専門宗学者の任務―	法華十八卷十二号	一九三一年十二月
山川 智応	宗学に於ける現在の諸潮流と吾等の態度	大崎学報八十号	一九三二年二月
遠藤 是妙	宗学の淵源	棲神二十号	一九三五年一月
室住 一妙	日蓮宗学新指針	棲神二十号	一九三五年一月

著者	題名	所収	刊行
真野 正順	宗学組織論	大崎学報八十六号	一九三五年七月
室住 一妙	純粹宗学の理念と其の発展	棲神二十三号	一九三七年十二月
室住 一妙	即身成仏研究序説	棲神二十四号	一九三八年十二月
武田 海正	宗学試案の中から	棲神二十五号	一九四〇年二月
室住 一妙	純粹宗学本質論の資料と問題	棲神二十五号	一九四〇年二月
馬田 行啓	宗学の不変性と可変性	『清水龍山先生古稀記念論文集』(清水龍山先生教育五十年古稀記念会)	一九四〇年十二月
安永 弁哲	宗学私観―吾等是如何に宗学すべきか―	『清水龍山先生古稀記念論文集』(清水龍山先生教育五十年古稀記念会)	一九四〇年十二月
室住 一妙	新体制下における本質宗学よりの提題	棲神二十六号	一九四一年三月
茂田井教亨	宗学断想	立正大学論叢創刊号	一九四一年十一月
室住 一妙	宗学とは何ぞ	棲神二十八号	一九四三年六月
塩田 義遜	『日蓮宗学概論』(平楽寺書店)	『日蓮聖人教学の研究』(平楽寺書店)	一九四三年十一月
浅井 要麟	祖書学の宗学上に於ける位置		一九四五年十二月
吉村孝一郎	祖書学と宗学	法華三十五卷一号	一九四八年六月
室住 一妙	宗学をつらぬくもの	法華三十五卷三号	一九四九年二月

著者	題名	所収	刊行
執行 海秀	宗教の領域と宗学の課題	日蓮宗教学研究大会紀 要一集	一九四九年三月
綱脇 龍妙	日蓮宗学の現代的徹底単純化と人間礼拝	日蓮宗教学研究大会紀 要一集	一九四九年三月
長谷川正徳	現代宗学の課題―方法に就いての―私見―	日蓮宗教学研究大会紀 要一集	一九四九年三月
茂田井教亨	宗学私見	日蓮宗教学研究大会紀 要一集	一九四九年三月
安永 弁哲	日蓮宗学の主体性	日蓮宗教学研究大会紀 要一集	一九四九年三月
渡辺 日宣	宗学の組織について	日蓮宗教学研究大会紀 要一集	一九四九年三月
鴨宮 英迅	根本宗学上より唱題往成論を提唱す	大崎学報九十七号	一九五〇年六月
齋藤 龍遵	一代五時の徹底と「いのり」の宗学	大崎学報九十七号	一九五〇年六月
竹田 日澗	永遠の過去より久遠の未来に到る迄永久の現代として必要なる当家の基本宗学	大崎学報九十七号	一九五〇年六月
長谷川正徳	現代における教学の問題	大崎学報九十八号	一九五一年七月
室住 一妙	現代宗学の基本問題	大崎学報九十八号	一九五一年七月
米田 淳雄	宗学の根本的立場	『望月歆厚先生古稀記念論文集』（望月歆厚先生古稀記念会）	一九五一年十一月
室住 一妙	純粹宗学の綱領的展開	棲神二十九号	一九五三年九月

著者	題名	所収	刊行
茂田井教亨	宗学觀に於ける個人的立場と種的立場	棲神二十九号・大崎学報一〇三号	一九五三年九月・一九五五年六月
大嶋 忠雄	日蓮(真正)仏教学の本質と課題について	大崎学報一〇一号	一九五四年七月
室住 一妙	純粹宗学における主体性	大崎学報一〇一号	一九五四年七月
室住 一妙	宗祖の主体性を究明するについての方法的考察	大崎学報一〇三号	一九五五年六月
有光友逸	実践宗学としての如来行	大崎学報一〇三号	一九五五年六月
森川博祐	進歩宗学とは何ぞや	大崎学報一〇三号	一九五五年六月
室住 一妙	われらなにをなすべきか、現代と対決するものとして問題学的に考える	棲神三十号	一九五五年十月
室住 一妙	建設のための吟味、純粹宗学における問題学的領域、	棲神三十一号	一九五六年十月
室住 一妙	体系といふこと	棲神三十二号	一九五八年三月
室住 一妙	宗学における体系の問題	棲神三十二号	一九五八年三月
望月 歓厚	序	『日蓮教学の研究』(平楽寺書店)	一九五八年十一月
室住 一妙	体系の展開	棲神三十三号	一九五九年十二月
室住 一妙	自己批判の問題点―純粹宗学の問題的素描―	大崎学報一二二号	一九六〇年十二月
室住 一妙	体系的対決	棲神三十四号	一九六一年三月
真野 正順	仏教における宗観念の成立	宗教学年報十五号	一九六四年

著者	題名	所収	刊行
茂田井教亨	宗学の客観性―跋にかえて―	茂田井教亨著『観心本尊抄研究序説』（山喜房佛書林）	一九六四年一月
望月 歆厚	序	茂田井教亨著『観心本尊抄研究序説』（山喜房佛書林）	一九六四年一月
芹沢 寛哉	宗学の論理と表現	大崎学報一二二号	一九六七年七月
執行 海秀	望月先生の宗学	大崎学報一二三号	一九六八年六月
室住 一妙	宗学論について	大崎学報一二三号	一九六八年六月
渡邊 寶陽	望月先生を偲ぶ	大崎学報一二三号	一九六八年六月
望月 歆厚	宗学各論	大崎学報一二三号	一九六八年六月
室住 一妙	宗学論私議―創造宗学への理解―	棲神四十一号	一九六八年十一月
渡邊 寶陽	宗学論―宗学論の回顧と展望―	現宗研所報 No.三	一九六九年三月
室住 一妙	宗宣言おぼえがき	棲神四十二号	一九七〇年三月
上田 本昌	松木本興先生の教化と近代宗学	棲神四十二号	一九七〇年三月
室住 一妙	純粹宗学と現代	現宗研所報 No.四	一九七〇年三月
勝呂 信静	宗学研究上の二、三の問題点	『日蓮教学の諸問題』（平楽寺書店）	一九七四年十二月
室住 一妙	現代を活かす宗学について	現代宗教研究九号	一九七五年三月
疋田 英肇	純粹宗学への道	棲神四十八号	一九七五年十月
茂田井教亨	宗学の主体性と客体性	棲神四十八号	一九七五年十月

著者	題名	所収	刊行
茂田井教亨	序	渡邊寶陽著『日蓮宗信行論の研究』(平樂寺書店)	一九七六年一月
茂田井教亨	宗学研鑽上の課題	大崎学報一三一号	一九七八年九月
茂田井教亨	序	庵谷行亨著『日蓮聖人教学研究』(山喜房佛書林)	一九八四年二月
庵谷 行亨	宗学研究について	『仏教学論集』(平樂寺書店)	一九八五年二月
室住 一妙	『純粹宗学を求めて』(山喜房佛書林)	室住一妙著『純粹宗学を求めて』	一九八七年三月
茂田井教亨	序	日蓮教学研究所紀要三十号	一九八七年三月
河村 孝照	宗学研究の方法論について		二〇〇三年三月

本稿では以上の表の中から、特に昭和七年(一九三二年)の『大崎学報』八十号に収録される、山川智応氏の「宗学に於ける現在の諸潮流と吾等の態度」を取り上げ、その内容を見ていきたい。

山川氏の論文に注目する理由としては、渡辺氏の「宗学論」において「日蓮宗において最初に宗学論を発表したのは山川智応氏^八」という記述があること、しかし同「宗学論」の中ではその内容や詳細については実際に取り上げられていないことから考察の対象とした。なお、【別表】によれば、山川氏の論文よりも時代の古いものに、北尾日大氏の「宗学及宗門教育の原理」(『大崎学報』六十一号、一九二二年)をはじめとして数本の著述が見受けられるが、こ

れらは今後の課題としたい。

三、山川智応「宗学に於ける現在の諸潮流と吾等の態度」について

山川智応氏（一八七九—一九五六）の「宗学に於ける現在の諸潮流と吾等の態度」は、昭和六年（一九三二年）の十一月十四日に行われた「宗学研究会大会」における講演の記録であり、これに補足を加えて、『大崎学報』八十号（一九三二年）に掲載されたものである。

同論文は、「一 宗学とは何であるか」「二 宗学における現在の諸潮流」「三 諸潮流に対する吾等の態度」「四 宗学の規模はいかん」の全四段で構成されている。以下に概観していきたい。なお、本稿における次の（一）から（四）までの見出しは、本稿執筆において便宜上私に附したものである。

（一）山川智応氏の宗学観

山川氏の論文の冒頭には、「一 宗学とは何であるか」という原文の見出しに示される通り、宗学の在り方についての同氏の疑問が提示される。

宗学とは何であるか。それは宗乗学であるとせられ、または宗義学であるとせられる。

宗乗学であるがゆえに、宗祖の立宗の本典を、古典註釈の態度によって研鑽することが宗学であるとせられ、宗義学であるがゆえに、本門本尊とは何ぞや、事の一念三千とは何ぞやというような、いわゆる宗義が議論せられる。これ等はいわゆる宗学とせられているが、宗学はそういうもののみあつてよいのであろうか。吾等は少しくこれを疑うものである。^九

この疑問に対して山川氏は、ご遺文を研鑽することは宗学の対象を把握する一つの方法であり、一方、宗義そのも

のも宗学の対象の一部面を論究するものであるから、「宗学の対象は、立宗本典の奥にあり、なほ宗義よりも奥にある^十」とした上で、祖意を得ることが宗学の肝要であると自答する。それでは、「祖意を得る」とはどのようなことか。それは「宗祖の宗教的体験と、その意趣を一つにしているか否か^{十一}」にあるという。

そこで、以上の自問自答を経て、「宗学というものの概念は、左の如くあるが妥当のことであると考える^{十二}」として、**【対象】** **【目的】** **【任務】** **【方法】** の四つの項目から宗学の在り方が提示される。

宗学の **【対象】** は宗祖の宗教的体験の全面容、**【目的】** は宗祖の宗教的体験の全面容を把握すること、**【任務】** はそれを他人に伝え、後世に残すこと。そして最後の **【方法】** については、特に重きをおかれているように見受けられ、それは次のように示される。

宗学の方法は、宗祖の宗教的体験の全面容を、正確に把握することではなければならないが、宗祖の宗教的体験は、その一生の遺文即ち著述消息と、一生の行動とに表現せられ、その体験は、所依の宗教的聖典に根拠するのであるから、そこに宗学は、必ず本経祖典の講究から出発せねばならないのである。そしてそれに働くべき心的機能は、単なる知識的理解でなくて、全心霊的の味識味解、または了解でなくてはならぬと思われる。即ち宗学することは、これを固定的知識とすることなく、本経及び祖典、殊に祖典とその祖の行動に対して、全心霊的の味識味解に依るところの研鑽、換言すれば、宗祖の宗教的体験を、流動せる「信」の脈動的表現として、これに接触しこれに参同し、これを了解する態度に出なければならぬと思うのである^{十三}。

そして、以上の如く宗学の概念を提示した後、「かくの如く解する吾等は、祖典の文書の本拠を調べ、語句を解釈することをもって『宗学』とすることは出来ない。『宗学すること』は、宗祖の宗教的体験を了解することである^{十四}」と結論する。その「了解」について、山川氏はデイルタイ哲学で用いられるところの「了解」（文化を生の表現とみなし、その内的な生と文化との構造関連を、自己の体験、自己移入、追体験などによってとらえようとする理解^{十五}）は、

「宗学すること」の態度に似通うものであり、「甚だその要領を得たものとおもう^{十六}」と述べている。

つまり、山川氏の規定する宗学とは、固定知識として単にご遺文や教学を知識的に理解することではなく、それは「宗学すること^{十七}」と述べているように、法華経やご遺文、聖人の一生の行動を通して、聖人の宗教的体験に宗学する者が主体的に向き合い、全身全霊で聖人の宗教的体験を追体験（了解）し、それを弘め残していくことと理解できる。

（二）当時の宗学の諸潮流

続いて、「二 宗学に於ける現在の諸潮流」では、当時の日蓮聖人門下の宗学界には、既成宗学の流れと新興宗学ともいべき新しい態度があるとして、その潮流を左記のように五つの立場に分類して説明を加えている。

既成宗学…（A） 教学的専門的態度 （B） 達意的宣伝的態度

新興宗学…（C） 思想的哲学的態度 （D） 批判的歴史的態度 （E） 社会的科学的態度

（A）の教学的専門的態度は、「宗祖の用いられた語、用いられた材料、用いられた考察法において^{十八}」、古典を古典として忠実に研鑽していく態度、（B）の達意的宣伝的態度は、その書の根本意趣を捉えることを主として、字句の末節など細かいことに拘泥しない態度のことである。

山川氏は（A）の態度は、「祖意いずれにありや」を慎重に求めんとするものであるから、純専門家的となり、その表現も訓詁的であるため、真摯ではあるが必ずしも愉快ではなく、「一般的には了解しにくい^{十九}」として、人々に伝える上では（B）の宣伝的達意的態度を併せ持つ必要があると述べている。

しかし（B）の態度は、時に「宗祖の主とせられた大綱を把ればよいのだ。細かいことを必要がない^{二十}」という考え

に立つことから、欠点として自分が主たる判定者になりがちであることを指摘し、「自見を主として祖意を第二にするようなことは、厳に慎まねばならぬ」とこれを戒め、「宗学そのものを、宗祖の宗教的体験の全面容を把握すること」と自覚することによって、その欠点を「脱れ得ようと思う」と述べる。

一方、新興宗学として挙げられた三つの態度は、既成宗学である(A)(B)のいずれかの態度を持ちつつ、さらにこれを当時の人々に伝えやすくするために、西洋の宗教哲学や、キリスト教神学、あるいは科学研究を取り入れた態度と言える。

中でも、(E)の社会科学的态度は特に近年(当時)に現われた態度で、当時の学界の公論であった大乘非仏説や科学的知識を肯定した態度だという。

この態度は、殊に科学で養われた今日の人々においては、

法華経及び一切経をもつて、釈迦牟尼仏の真説とし、その中に方便と真実とを分ち、その法華経の壽量品の文上に示されたるが如き久遠実成の人格的本仏が、超越的に宇宙のいずれかに実在するなどという如きは(中略)信ぜられるべき性質のものではない

そして、

況んや法華経は、仏説でないのみでなく、その後、しばしば添加せられたものである。日蓮聖人はその添加せられたる法華経によって、一切経を釈尊の真説と考え法華一宗を立てられたのであるから、今日の科学的研究を肯定すれば、經典本位、聖典本位の、聖教量本位は根本的に解消してしまわねばならぬものである。

という前提に立ち、法華経や日蓮聖人を一つの思想と捉え、現代社会に見直し返して社会案のヒントを与えるものとして用いるべきであり、そこにのみ「日蓮は甦る」と主張する態度であることが述べられている。

（三）既成宗学と新興宗学に対する見解

新興宗学は当時の時代の趨勢によって、近代学問を取り入れて新たに生まれた態度と理解できるが、山川氏は「三諸潮流に対する吾等の態度」において、新興宗学と既成宗学は決して対立するものではなく、「現代学風が、既成宗学なる古典学風を排斥し、または古典学風が、新興宗学たる現代学風を排斥する、いずれにも賛同することが出来ない」と述べ、両者がお互いの限界を知って両立し相扶くべきものであることの必要性を説く。

それは、宗学がそもそも

宗祖の宗教的体験の全面容を把握することであると解すれば、その宗祖の宗教的体験は、死せる固定せる宗義の骨格だけでなく、血脈皮肉を具えたる、流動せる「信」の脈動を伝えるものでなければならぬ^{二七}

から、活ける宗教的体験は時代が異なっても、「その時代に応じて開顕発展せらるる筈のもの」であり、だからこそ、既成宗学は「教学的に厳密周到なる態度を採る」と共に、新興宗学に対して寛容であるべきことを求めている。

他方、新興宗学に対しては、「日蓮聖人の宗教的体験の全面容からする、当然の推理、当然の意識において認容せらるる限度において、新興宗学は自由なる研究を進むべきであらう」と述べて研究の発展を奨励する一方で、そのためには「宗祖の宗教的体験の全面容を把握する」という宗学の根本が必要であり、もしこれを忘れれば、「それは仏教中の日蓮宗に関する一の学術的研究ではあり得ても、『日蓮聖人の宗の学』ではなくなるであらう」と注意を促す。

ここに徹底しているのは、再三述べられる「宗学とは宗祖の宗教的体験の全面容を把握すること」であろう。すなわち、宗祖を一個の思想人、あるいは先達として向き合うことは、それは仮に他宗では許されても、

日蓮聖人の宗では、上行菩薩として、末法の大導師として、一閻浮提第一の智人として、預言せられ、預言する人として、主師親三徳の教主として、断じて一個の先輩扱いをすることは出来ない^{三十二}

と断じているように、山川氏における「宗学すること」は、宗学する者の宗祖に対する宗教的信仰が絶対の要件とさ

れ、宗祖への宗教的信仰から離れることは、「日蓮聖人の宗の学としては無用」^{三十三}のことなのである。

したがって、当時の仏教学の発展とその成果によって、法華経の成立や解釈が変わることがあったとしても、「学術上それは必ず成さるべきこと」^{三十四}で、「我等の宗の人が科学的研究の業績を進歩せしめられて行くことは、歓迎すべく尊敬すべきこと」^{三十五}として、その研究の発展・業績を期すべきものとしつつも、しかしそれは羅什訳『妙法蓮華経』に依って立たれた宗祖の宗教的体験である宗学にはなんらの直接関係を及ぼすものではなく、「日蓮聖人の宗教宗学について、どれだけのかの変更を要するものとは見ない」^{三十六}と述べるのである。こうした姿勢から、大乘非仏説に対しても同様の見解が示される。

(四) 新たな宗学体系の提示

そこで、既成宗学と新興宗学は相扶けるものとする山川氏は、「四 宗学の規模はいかん」において、両者を相互に包容した新たな総合的宗学の体系として、「純粹宗学」と「実践宗学」の二つが開かれるべきことを提唱し、それを次表のような組織図^{三十七}として提示^{三十八}する。

第一部 純粹宗学

第一門 教学的研究

第一科 聖典註疏的研究

第二科 聖伝讃仰的研究

第三科 各種論題的研究

第四科 宗学史的研究

第五科 組織系統的研究

第二門 現代学的研究

第一科 本文批評的研究

第二科 史の人格的研究

第三科 仏教教理の研究

第四科 宗教学的研究

第五科 宗教哲学的研究

第二部 実践宗学

第一門 对社会的研究

第一科 寺院史的研究

第二科 比較教会史的研究

第三科 文化史的研究

第四科 社会史的研究

第五科 現代社会的研究

第二門 对思想的研究

第一科 对科学思想研究

第二科 对哲学思想研究

第三科 对マルクス思想研究

第四科 对キリスト教思想研究

第五科 対欧米文化思想研究

第六科 対仏教各宗思想研究

第七科 対日本主義思想研究

第一部の「純粹宗学」は、宗祖の用いた語や材料、考察法に基づいて、宗祖の宗教的体験の全面容を明かにする第一門の教学的研究と、それを現代の社会環境に対して翻訳し、現代的に表現する第二門の現代学的研究から構成される。

第二部の「実践宗学」は、第一部の「純粹宗学部門」が「宗祖の宗教的体験の全面容の把握」であるのに対して、宗祖の宗教的体験の本質を、時代や社会、その時代思想へ適用するべく働きかけるための行動を研究する部門である。この部門では、宗祖の宗教的体験を把握することを目的とするのみならず、これを他人に伝え、社会的に実現して後世に残すことが任務とされる。

「純粹宗学」は山川氏自らが「本態宗学」^{三十八}と名付けているように、宗学が「宗祖の宗教的体験の全面容を了解」することを目的とするのであれば、その遺文や宗祖の行動、法華経の研鑽は是非とも必要とされなければならない。

ところが、本態であるところの既成宗学は、「現代学術と全然没交渉であり、疎隔せられをはるからであり、また更に純粹宗学が疎遠とされるのは、それが現代社会、現代思想へと働きかけないから」^{三十九}と述べられるように、当時、硬直的であり、往々にして無用視されていたという。

だからこそ、「宗祖の宗教的体験を了解する」「祖意を得る」という宗学の本質を根底におきつつ、その時代に適応するために現代思想を取り入れ、科学で養われた当時の社会の人々に向けて働きかける「実践宗学」（これを山川氏は「動態宗学」^{四十}と換言する）が要請されたものと理解できる。

以上、山川氏の論文を概観してきたが、その論文の最後には、「基督教神学を超えよ」という項目が設けられている。ここで山川氏は、先に示した宗学の組織図について、「人もしこれをもって、あまりに広凡に過ぐとするならば、それは基督教にも若かざるものである」と述べた上で、基督教神学は、今や歴史的神学、系統的神学、実践的神学とに分けられるとして、基督教史学者である石原謙氏（一八八二—一九七六）の基督教神学の体系図を引用されている。^{四十一}

一、歴史的神学

解积的神学

聖書学

聖書註釈法

猶太教及原始基督教史

聖書神学

基督教史

教会史及宗義史

信条学

教会考古学

教会制度及礼拝聖式史

初代基督教美術及道德

各時代基督教徒生活史

伝道史

異端史

教会現勢論

世界各地教会内部外部情勢

二、系統的神学（又は組織神学）

宗義学

辨証学

教争論

基督教倫理学

三、実践的神学

教会学

聖式論

説教学

牧舎学

この体系図について山川氏は、「基督はおそらく学術的に、こんなものが発展するとは予期しなかったであろう」^{四十三}と述べ、素朴なる聖書の解釈のみであった基督教神学の発展を指摘する。そして、「甚だ小規模」^{四十四}な日蓮宗の宗学も、今日それを確立すべき時勢に遭遇したと思われるとして、その建設を望んで本論文は結ばれる。こうした記述から、山川氏が宗学がどのような学問体系であるべきかを検討された際、その背景の一つには、先に図で示した如く、体系化された基督教神学があったことを伺い知ることが出来るのである。

四、おわりに

以上、宗学について考えるにあたり、渡辺宝陽氏の先行研究に示唆を受け、特に本稿では、山川智応氏の「宗学に

於ける現在の諸潮流と吾等の態度」について少しく概観してきた。同論では、対象・目的・方法・任務の四つの視点から宗学の本質を論じ、合わせて当時の宗学界における既成宗学と新興宗学の潮流を分析し、その両者を包括した総合的な体系として、純粋宗学と実践宗学から成る新たな宗学の在り方を提示されている。

山川氏の宗学は、「祖意を得る」ことが何より肝要であり、日蓮聖人の宗教的体験に法華経やご遺文を通して主体的に関わり、「宗祖の宗教的体験の全面容を了解すること」であると理解できる。そして、それは単に固定知識とすることではなく、他人に伝え、社会に実践して後世に残すことが任務であり、だからこそ、あくまでも「祖意を得る」ことを根本として、当時の社会や科学で養われた人々に働きかける手立てを思索されたことが伺えた。

今後は、引き続き諸先師の宗学論を考察し、宗学への理解を深めるとともに、現代において日蓮聖人の教えを学ぶ自らの姿勢について考えていきたい。

一 『日本国語大辞典』十卷（小学館、一九七四年）二〇九頁

二 『広説佛教語大辞典』中卷（東京書籍株式会社、二〇〇一年）七五九頁

三 『日蓮宗事典』

四 「宗乗」とは『岩波仏教辞典』によれば、「（宗）は教えの尊崇・信奉・主旨を意味し、（乗）は悟りに至る乗り物の意。みずからの属する宗派の教学を（宗乗）といい、これに対して他の宗派の教学を（余乗）と呼ぶ。もとは禅宗で用いられていたが、やがて各宗それぞれに自宗の教学にこの称を用いるようになった。」（同書三九五頁）とあり、また『広説佛教語大辞典』中巻では「乗は乗り物で教えのこと。自己の最も尊重、信奉する教えの意。①もと禅宗ですべての仏教を宗乗と余乗に分け、禅宗の教えを宗乗とし、その他の教えを余乗と称した。したがって宗乗は禅門の教えの意。②後に転じて、各宗の教義学をいう。」と解説される。

五 七百余年の日蓮宗宗門の歴史から見れば、宗学という言葉は比較的近年の呼称であることが理解できる。

六 日蓮宗現代宗教研究所編『所報』第三号（日蓮宗宗務院、一九六九年）十八頁

七 例えば、同論文では昭和二十三年の「第一回日蓮宗教学研究発表大会」についての記述がある。それによれば、同大会では学者のみならず、在野の教師からも「宗学」についての発表がなされ、「宗学の将来」というテーマで討論会が行われた事などが記されており、宗学に対する当時の熱意や気運を伺うことが出来る。

八 渡辺宝陽「宗学論―宗学論の回顧と展望―」二十一頁

九 『大崎学報』第七十号（一九三二年）五頁

十 右同五頁

十一 右同七頁

十二 右同七頁

十三 右同七頁

十四 右同八頁

十五 『日本国語大辞典』二十卷（小学館、一九七六年）三八八頁

十六 『大崎学報』第七十号（一九三二年）八頁

十七 右同八頁

十八 右同十二頁

十九 当時の若い学生にも（B）の態度が悦ばれたようである（右同十四頁）。

二十 右同十五頁

二十一 右同十五頁

二十二 右同十五頁

二十三 右同十五頁

宗学について（古河）

二十四	右同二十頁
二十五	右同二十頁
二十六	右同二十二頁
二十七	右同二十三頁
二十八	右同二十三頁
二十九	右同二十三頁
三十	右同二十四頁
三十一	右同二十四頁
三十二	右同二十四頁
三十三	右同二十五頁
三十四	右同二十六頁
三十五	右同二十六頁
三十六	右同二十五頁
三十七	右同三十一頁～三十三頁
三十八	右同三十八頁
三十九	右同三十八頁
四十	右同三十八頁
四十一	右同四十一頁
四十二	右同四十一頁～四十三頁
四十三	右同四十三頁
四十四	右同四十三頁